地方会に新たな課題を

大分県代表幹事 **木　舩　敏　郎**

30周年にあたり、この10年を振りかえって小児歯科医療のさま変わりに、仏教の教えのような無常観にしみじみと感じ入ります。

私の卒業当時、大学の小児歯科は大量の治療待ちの新患をかかえ、泣く子供にレストレーナ使用して、FC断髄と乳歯冠セットの処置に追われていた。開業当時、前歯にもCR充填の計画を説明すると、母親からサホライド塗布で結構と言われ続けた。

この十年、私の診療所ではレストレーナの使用は無くなった。FC断髄や乳歯冠の使用もほとんど無い。他で治療されたサホライドや金属を、白い歯にしてほしいと受診する初診患者が増えてきた。今後、少しでも子供が泣くと、治療中止を申し出る両親は増加し続けるだろう。小児歯科学会に吹き荒れたディスクレパンシーの嵐は、通り過ぎて行った。前歯部の叢生の発現に、今から硬い物を食べたら治りますかと質問する母親が続出したが、今はいない。

時代の変化に対応し、一般歯科医が子供の歯科治療で何を心得るべきか、小児歯科専門医として何に対応するのか、今後の地方会の課題としていただきたいと思う次第です。

祝・30周年

宮崎県代表幹事 **井　上　浩　一　郎**

九州地方会30周年、おめでとうございます。

自分自身は、昭和63年に、母校である鹿児島大学歯学部の小児歯科学講座に入局し、現在まで小児歯科に関わってきました。大学在籍中の地方会の思い出というと、恥ずかしながら、研究でも臨床でもなく、懇親会であります。当時は、地方会学会後の懇親会で、各大学の新入医局員紹介の際に何かしらの芸を披露しており、毎年楽しみでした。

鹿児島大学主催にて、沖縄で開催した地方会学会後のビーチでの懇親会で、自分も含め多くの先生方がはじけたことは今でも忘れられません。また、野球の対抗戦も楽しかったです。ユニフォームを持たない我々は、Tシャツに、ロゴとネームと背番号を手書きで書き込み、試合に臨みました。地方会への交通手段として、鹿児島から福岡までオートバイで移動したこともありました。今思えば、よくあんなエネルギーがあったものだ。

研究や臨床につぎ込むべき力をそんなところに注いでいたんだなぁとあらためて反省？しております。でも、そういう遊び心が、子供たちに携わる小児歯科の原点なのかな？と身勝手な解釈をし、納得しております。

時代が変わり、一開業医と立場も変わりましたが、これからの九州地方会が盛り上がることを願う気持ちは今も変わりません。